

## 春採湖と30年

博物館の新館が、春採湖を見下ろす高台にオープンして、今年31年目を迎えました。その間、春採湖の四季の移り変わりをずっと見てきましたが、湖の結氷や解氷には、一定の法則があることが分かりました。

毎年11月後半から12月になると、春採湖が結氷し始めます。湖の水は、湖北半部から張りはじめ、やがて沼尻側の南へと進み全面が結氷するのです。ただし波のたちやすい場所や水の入り込むところなどは、なかなか凍りません。そして春の解氷は、暖かい水の入りに口から解けはじめ、結氷とは逆に湖の北側から南へと湖面を広げていくのです。

湖の全面結氷日と全面解氷日は昭和60年から記録しています。その年から昭和62年の全面結氷は11月26～28日、全面解氷は4月10～11日とほぼ一定でした。しかし、暖冬と言われた昭和63年から平成19年までは、全面結氷がすべて12月となっています。

ところが平成20年の全面結氷は、記録を取り始めて以来初となる1月にずれ込みました。チャランケチャシの東側の一部がなかなか結氷しなかったため、とうとう年をまたいで1月5日に全面結氷したのです。どうもこの年は、北海道は冬型の気圧配置が続かず、暖気が入りやすくなっていたのが原因のようです。札幌管区气象台によると、その年の冬の平均気温は、すべての観測

地点で平均を上回っていました。そのため結氷が遅れたのは春採湖だけではなく、北海道の冬の風物詩、ワカサギ釣りの解禁日が大きく遅れた湖も多かったようです。

その後平成21年から昨年までは、12月8日から29日間に全面結氷日を迎えています。

全面解氷日は、平成2年の3月31日と平成20年の3月28日以外は、すべて4月の月上旬に集中し、最遅だったのは、平成24年の4月26日でした。昭和60年から30年間記録してきた春採湖の全面解氷日の平均は、4月10日です。

また、同じく昭和60年から記録してきた春採湖の全面結氷日の平均は、12月11日となっています。

(山代淳一)

## 小さな来客

毎年夏になると楽しみにしている小さな来客があります。わが家の庭は花壇と自家菜園が半々くらいなのですが、畑の方に雀が親子でやってくるのです。餌をあげているわけではないので、虫でも食べにきているのでしょうか。2,3羽で来るときもあれば、2,30羽で大挙して来るときもあります。

羽の色合いがくっきりした親鳥に対し、ヒナは全体に色合いが薄く、頬の模様もまだよく判りません。餌をねだる様子がとても可愛らしいのですが、親鳥がそばにいないと自分で地面をしっかりとつついて、人間の目からはちゃっかりしているように見えるのがまた可愛く感じます。初めは飛び方もおぼつかなく、着地もふらふらしていたのが、だんだん



上手くなっていくのを見るのも楽しみです。

雀が飛んで行った後、小さな穴がぼこぼこ沢山できています。砂浴びをした後なのですが、数えてみると今年は何も植えていない2畳ほどの場所に15個もありました。何度も同じ場所で砂浴びをするので、穴はどんどん深くなっていきます。特別深くなっているいくつかの穴は何か違うのでしょうか。夕方群れで来ることが多く、その時は満員になります。一斉にふくらませた羽を震わせ砂浴びをしている様子は可愛いけれど、つい笑ってしまいます。雨の直後はさすがにしませんが、水が引いて土が生乾きにしか見えない状

態でもやってくる強者もいます。砂浴びそのものは羽や体をきれいにするためのもののようですが、そんな状態の土でも効き目があるのでしょうか。

写真に撮りたくて毎年チャレンジするのですが、手持ちのコンパクトカメラではズームの倍率が小さい上に腕も伴わず、さらに被写体の色合いが土と変わらないため、ただ茶色い地面を写しているようにしか見えないのが残念です。

以前は年中結構な数の雀が来ていましたが、最近は繁殖の時期以外はあまり見かけなくなりました。建物の構造上巣が作りにくくなった、また病気が原因で数が減っているのではという報道も見ます。来年もまた来てくれるといいなあ・・・と思いつつ賑やかな砂浴びを眺めています。(福岡明子)